横芝光町民ギャラリー企画展図録

考古資料で見る
横芝光町の歴史展２
弥生・古墳時代

横芝光町教育委員会

はじめに

横芝光町は、南を黒潮が洗う太平洋に、水田が広がる九十九里平野、北部は下総台地の緑濃い里山がアクセントとなり、町の中央をゆったりと栗山川が流れ、文字通り山紫水明の地といえます。この豊かな土地には、古くから人々が住み、様々な営みや文化が育まれてきました。とのトチの歴史を知ることは、自分たちの足元を見つめ直し、この知に愛着を持つきっかけとなることでしょう。

「考古資料で見る横芝光町の歴史２」は、昨年の「考古資料で見る横芝光町の歴史１」に引き続き、弥生時代から古墳時代を取り上げ、稲作文化が入った変革の時代から、国の形か出来上がっていく過程を、町内から出土した遺跡や遺物を通して見ていくことにします。この時代は日本で長く続いた縄文時代が、大陸から伝わった稲作文化によって弥生時代という新しい時代に転換し、人口の増加によって共同体が拡大し、集落から古代国家へと急速に発展していった歴史の激動期でありました。このわずか千年という期間の激動の時代を通過したことにより、日本は原始の時代から歴史への時代へと進化した時代でもありました。

町内では、これまでの発掘調査によって、この変革期を示す遺跡―縄文時代から弥生時代へ―や、武射国造の墓とも言われる殿塚・姫塚古墳をはじめとして、多くの遺跡があります。まさに変革と国の形成に関わる先端地域を示す遺跡が、この町にはそこかしこに存在するのです。それはこの地域の様々な特徴―自然・地勢・地政など―が絡み合って、多くの人々が営んだ証拠といえるでしょう。そうした過去の人々の営みの証を見ることによって、この地域の良さと未来について考えていただければと思います。

目次

はじめに
目次　例言
年表　1
１．弥生・古墳時代の日本
（1）弥生時代のはじまり　2
（2）弥生時代の展開　3
（3）弥生土器の変遷　4
（4）邪馬台国の時代から大和大王の時代へ　6
（5）横芝光町の弥生・古墳時代遺跡　7
２．横芝光町の弥生時代遺跡・遺物
（1）長倉宮ノ前遺跡　8
（2）長倉鍛冶屋台遺跡　11
（3）神山谷遺跡　13
（4）篠本城山遺跡　15
（5）寒風城跡　15
（6）芝崎中島遺跡出土の有角石器　16
３．古墳時代の遺跡・遺物
（1）殿塚・姫塚古墳　17
（2）寺方古墳群　22
（3）長倉鍛冶屋台遺跡　24
（4）長倉宮ノ前遺跡　26
（5）小川台古墳群　28
（6）宝米古墳群　32
（7）夏台古墳　33
（8）篠本城山遺跡　35
（9）神山谷遺跡　37
(10) 芝崎古墳群　40
(11) 傍示戸遺跡　41
参考文献　協力者　42

例言

本書は、平成25年10月5日から11月24日まで、横芝光町立図書館２階町民ギャラリーで開催された企画展「考古資料で見る横芝光町の歴史２」展の図録である。

本図録の執筆編集は、横芝光町教育委員会社会文化課生涯学習班道澤明があたった。

写真の一部は、芝山はにわ博物館の提供を受け、殿塚・姫塚古墳の測量図は、早稲田大学文学部考古学研究室の了承を受けて掲載しました。記して御礼申し上げます。

横芝光町の歴史年表（弥生時代～古墳時代）

| 時代 | 原始 | | |

１．弥生・古墳時代の日本

（１）　弥生時代の始まり

日本列島は大陸から隔絶され、１万年という長い間、縄文時代という独特の文化を発展、展開してきた。その独特な縄文文化世界を破ったのが、大陸から伝わった稲作文化である。それまでの縄文時代の中にも農耕が行われていたと言われ、縄文遺跡から栽培植物も検出されているが、畑跡のような農耕遺構は検出されなかった。それが稲作という農耕は、水田という農耕施設が必要となり、それに伴う灌漑・排水施設、それを維持する組織（共同体）、、毎年継続する体制、稲を込めとして食する技術など、ただ単に稲を作って食べるだけでない、大きな発想の転換があったはずである。しかし、日本に入った稲作文化は急速に列島に広がり、縄文文化を変化して行った。

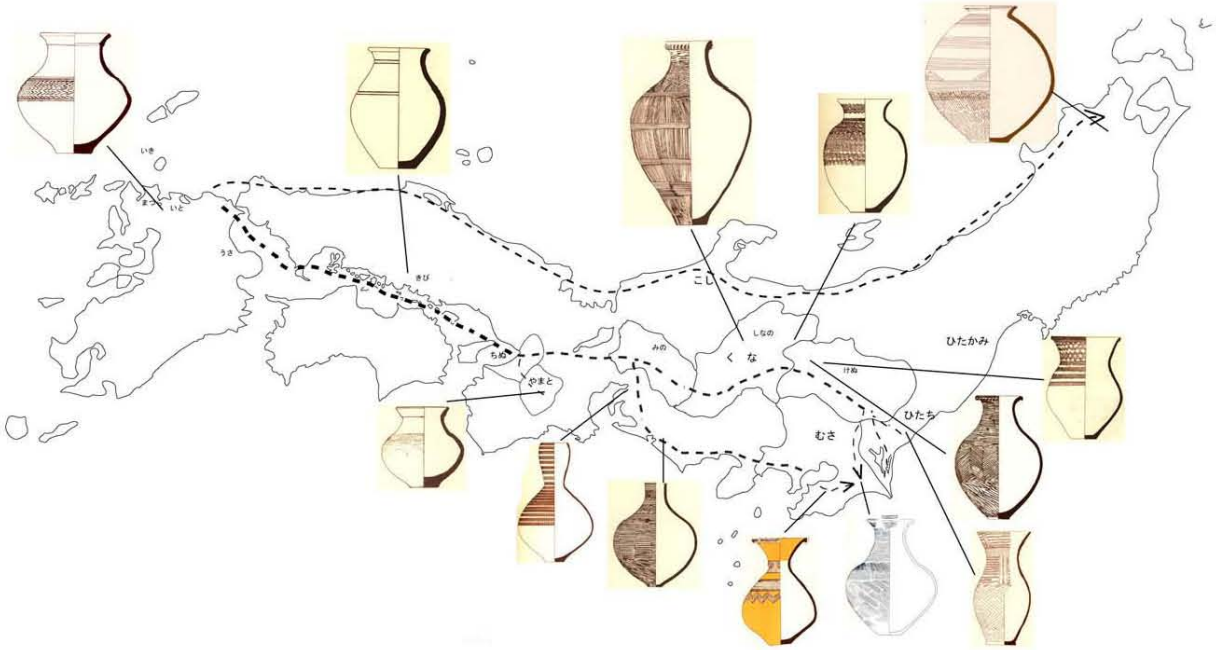
日本に稲作文化が入ったのは西暦前１千年とも、前 500 年ともいわれているが、まだ定かではない。これまでの研究ではこの間くらいの年代に、北九州に伝わった稲作文化によって弥生時代が始まったとされる。そして今の名古屋付近まで急速に弥生文化は進出し、関東へは 500 年遅れて浸透したと言われている。それはやはり縄文文化の根強い伝統があったからとも言われる。

(2) 弥生時代の展開

縄文時代から弥生時代に取って代わった日本列島は、稲作という安定的な食料を確保できたことから、急速に人口を増していった。それにまた、大陸からの渡来人の流入も拍車をかけ、弥生文化が列島の東へ広がるのは時間の問題であったろう。前期の終わりには濃尾平野まで行き着き、中期には東北南部まで広がった。また、それとは別に青森には前期に出現し、日本海を北上しての弥生人の旺盛な進出があったことが知られる。

人口の増加は争いを生むことになり、中期になると多くの集落で周りに壕を掘った防御機能を有した施設が現れる様になる。これを環濠集落と呼ばれ、九州の吉野ケ里遺跡、畿内の唐古鍵遺跡、関東では横浜の大塚遺跡、千葉では佐倉の大崎第遺跡など、各地で見られる。また、西日本では小高い山上に集落を構えた高地性集落も現れる。このように中期は全国的に争乱があったことが想像され、中国漢代の書に記された倭国の大乱がこれに当たるのではないかといわれている。

関東への弥生文化の進出には、中期の濃尾平野からは二筋のルートがあったことが知られ、それが関東の弥生文化の展開に大きな影響を与えた。その一つは濃尾平野から木曽川沿いに内陸を伝ったルートで、後世の中山道とほぼ一致する。もう一つは東海の海岸沿いに伝ったルートで、これは東海道に当たる。そしてこの２ルートを経ることによって、弥生土器は変化の過程を変え、異なる土器を産み出した。その異なる土器が再び顔を会せたのが我々の住む千葉なのである。中山道を伝ってきた弥生土器は、群馬から東へと進み常陸にまで達し、また南下して下総地域にまで広がった。東海道を伝ってきた弥生土器は海岸沿いに東へ進み、房総半島から上総地域に広がった。そして栗山川を挟んで再び出会ったのである。

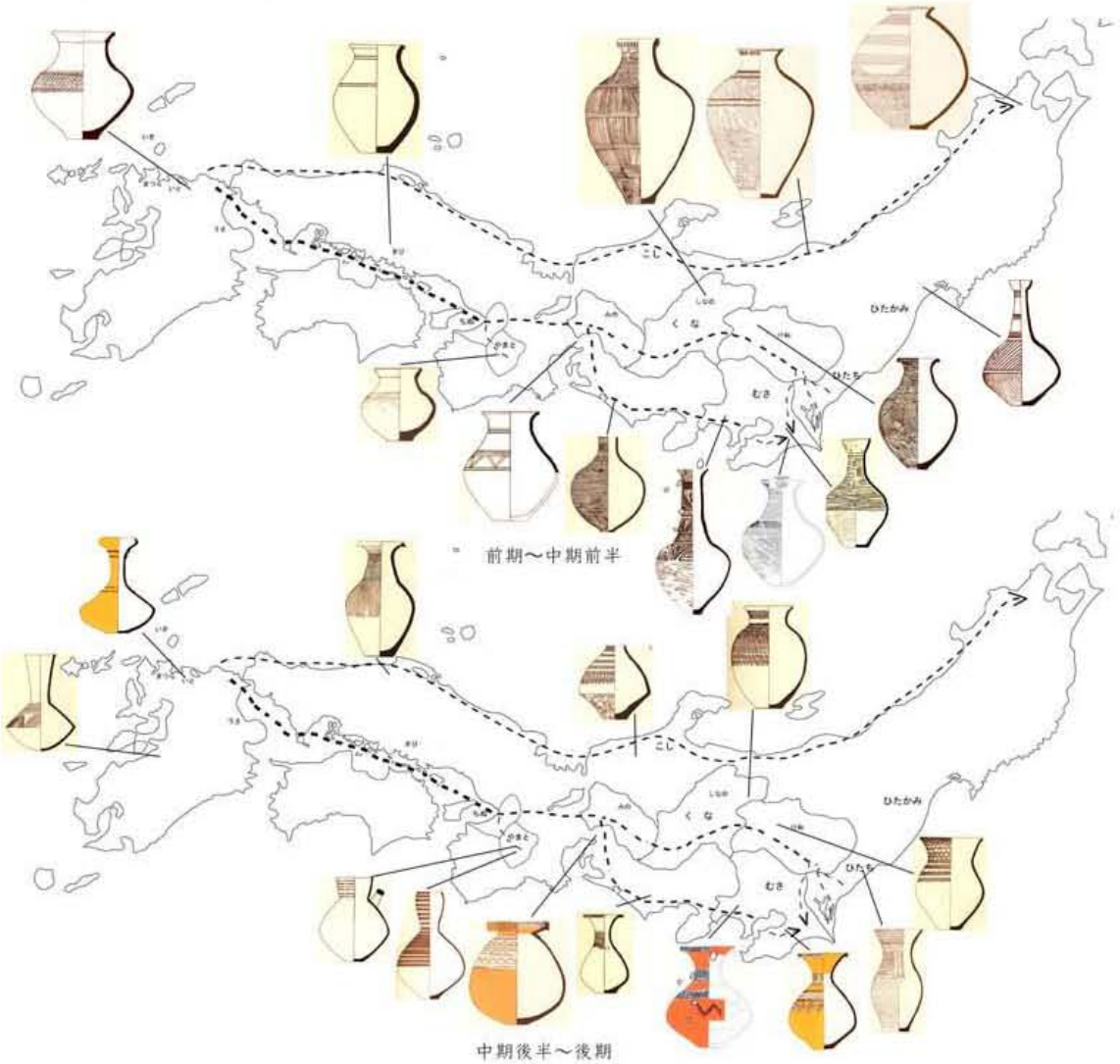


弥生土器の東への浸透と変化

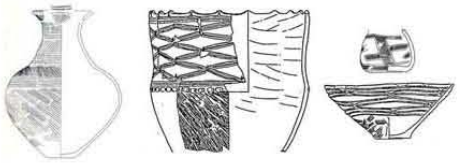
(3) 弥生土器の変遷

これまで述べてきた様に、弥生文化は稲作をその基盤として、大陸に最も近い北九州から始まり、急速に東へと拡大して発展していった。稲作が基にあることから、生活の全てで縄文文化とは異なり、使う道具から習慣に至るまで、大きく変化していった。その中で今日考古資料として見られるものの中で、もっとも端的に表しているのが土器である。縄文土器には形としてはさまざまな物があり、紋様も付けられていて、中には実用的に見えないものまである。しかし、弥生土器になるとほとんど文様は亡くなり、形は実用的なものがほとんどとなる。お米を貯蔵するための壺、ご飯を炊く甕、餅を蒸す甑、ご飯を盛る高杯などが組み合わせとなって土器が構成される。また、石器では大陸から伝わった石斧や石包丁が使われ、西日本では銅鏡をはじめとして、銅剣・銅矛・銅戈・銅鐸などが盛んに造られ、弥生時代を青銅器時代ともいわれた。このように弥生時代は、それまでの縄文時代の土器・石器の時代から、水田稲作と金属を使う新しい時代へと踏み出したのである。

ここでは主に弥生土器について取り上げ、その変化を概観して弥生時代の歴史を追って見よう。

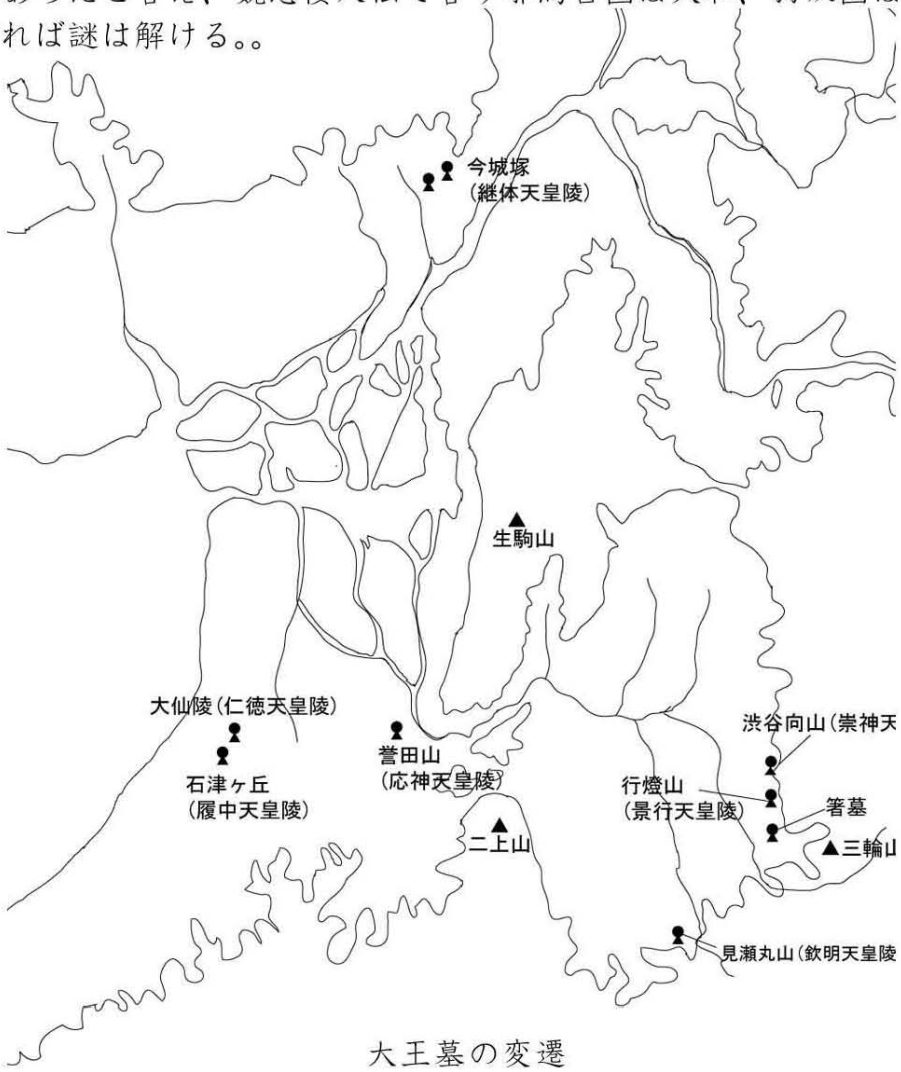


弥生土器の変遷

	西日本（九州～畿内）	東日本（千葉）
前期		
中期		
後期		上総 下総

(4) 邪馬台国の時代から大和大王の時代へ（弥生時代から古墳時代へ）

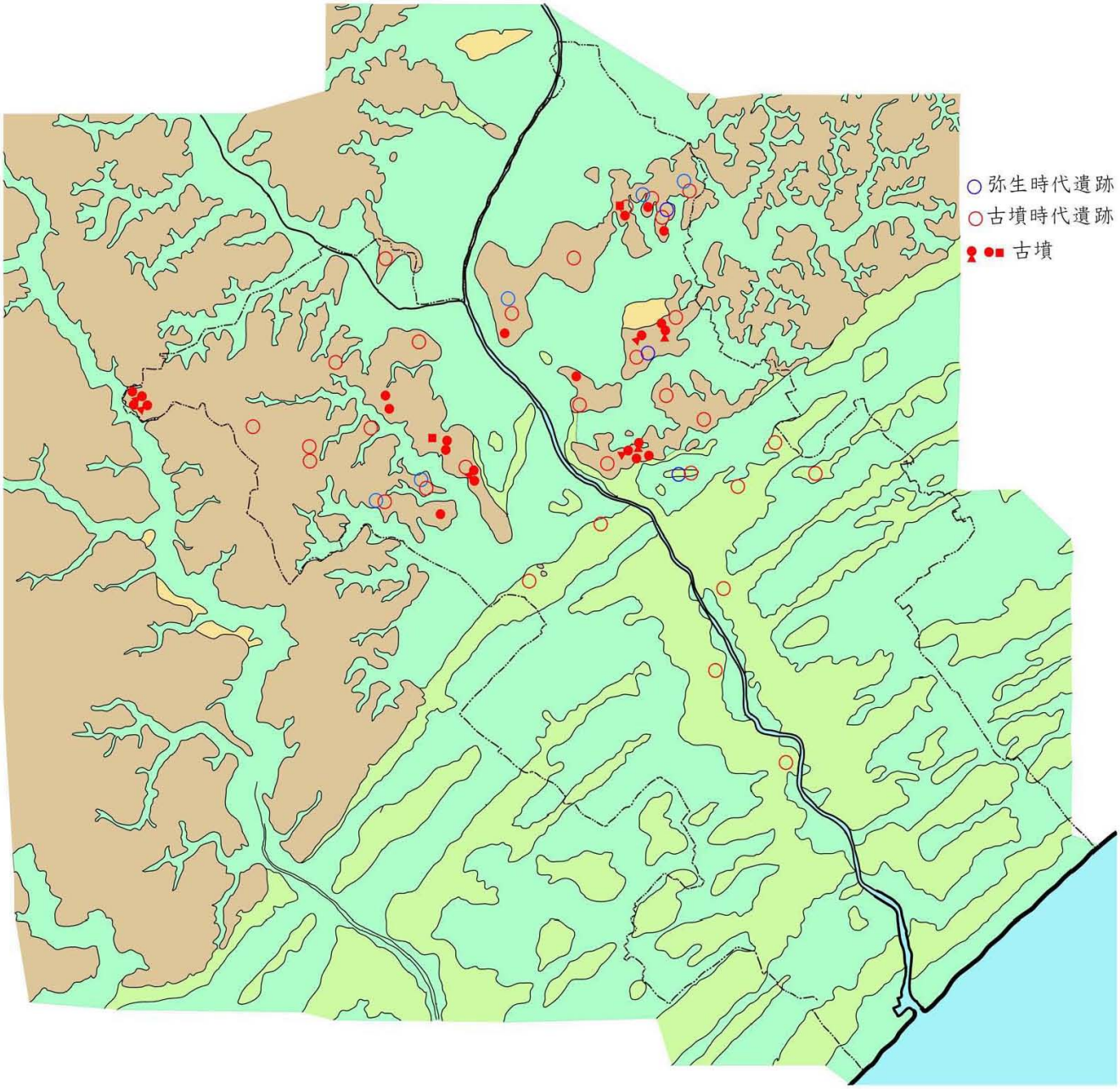
弥生時代の終わり頃になると個々の集落が国と呼ばれるようになり、中国の書にも北九州に奴国・伊都国と呼ばれる集落国家があったことが記されている。そして３世紀にまとめられた三国志魏志倭人伝に邪馬台国が登場するのである。邪馬台国はその記述から日本列島のどこかにあり、女王卑弥呼を中心に倭国を治めたとされる。その場所については北九州説と奈良盆地説とが中心となって論争が続いているが、遺跡例やその後の時代背景等を考えると奈良盆地説が有力となっている。奈良盆地でも南部の桜井市には巻向遺跡という弥生時代終末から古墳時代の遺跡が三輪山の麓に展開する。巻向遺跡には石塚古墳、その前面には卑弥呼の墓といわれる箸墓古墳があり、さらに北には傾向天皇陵と言われる行燈山古墳、崇神天皇陵と　言われる渋谷向山古墳と前期古墳―三輪王朝の古墳がある。中期になると大阪平野に移り、応神天皇陵と言われる誉田山古墳、仁徳陵と言われる大仙陵など河内（応神）王朝の古墳がある。そして後期は大阪北部の継体陵の今城塚、飛鳥の欽明陵と言われる見瀬丸山古墳がある。このように前期以降大王墓が中期、後期と移動するのは、王朝の交代があったと言われている。この王朝交代には、前時代の弥生時代に基盤があったと思われる。応神王朝は宇佐を発祥とし、東海から南関東（むさ）を基盤とした王朝であり、継体王朝は、大阪湾から近江―美濃―信濃―毛野を基盤とした王朝であった。これらの王朝の交代とその基盤勢力の対立抗争は、弥生時代からの海人族集団の抗争であったと言え、魏志倭人伝で言う邪馬台国は大和、狗奴国はけぬであったとすれば謎は解ける。。



大王墓の変遷

(5)横芝光町の弥生・古墳時代遺跡

横芝光町には、多くの遺跡が分布するが、その多くは北西半分を占める下総台地にある。その中で弥生時代の遺跡はこれまでのところ７箇所が確認され、決して多くはないが、古墳時代になると20箇所以上になり、また、古墳も多数築かれる様になり、その頃急激に人口が増加したことが分かる。古墳はほとんどが台地の上の築かれているが、古墳時代遺跡（集落跡）は九十九里平野の低地への進出も見られる。古墳の中には国指定史跡になっている殿塚・姫塚古墳が有名であるが、それ以外の多くは耕地整理等の開発により消滅し、数を減らしている。現在残っているものだけでも、保存していく努力が必要である。



横芝光町の弥生・古墳時代遺跡分布

2. 横芝光町の弥生時代遺跡・遺物

(1) 長倉宮ノ前遺跡

長倉宮ノ前遺跡は、大総地区の南部、九十九里平野から入る谷津に侵食された標高35mの台地上にあり、東から入る谷の谷津頭と南は切り立つ斜面で、台地は平坦面の狭い丘陵状の地形となっている。遺跡からは弥生時代の遺物のほか、旧跡維持代の石器や縄文時代早・後期の土器、古墳時代の集落、江戸時代初めの経塚などが検出され、様々な時代にまたがる遺跡である。また、遺跡に接して郷社である大宮神社があり、遺跡の名の元ともなっている。

長倉宮ノ前遺跡

弥生時代の遺物は、遺跡の谷津頭部の径10mの範囲で、土器片や石器などだけが地層から出土したのみで、たぶんここは土器などの捨て場であったと思われる。しかし、これらの遺物を残した人々の生活の跡(住居跡等)は、遺跡からは発見されなかった。おそらくまだ発掘されていない周辺に、住居跡があるかもしれない。

弥生土器の出土状態

長倉宮ノ前遺跡から出土した土器の一群は、中には縄文土器とも言えるものがあったり、愛知から搬入されたと考えられる弥生土器が含まれていたりと、複雑な複雑な様相を示している。壺形土器はまさに弥生土器である一方、鉢形土器は縄文と言うように、両者が混在する。この一群の土器は研究者によって意見が分かれるところであるが、縄文から弥生への過渡期の一つの表れとして理解されよう。

弥生土器の出土状態

東海地方からもたらされた壺

出土した弥生土器

宮ノ前遺跡出土の弥生土器と飾玉・石器

（2）鍛冶屋台遺跡

長倉鍛冶屋台遺跡は、長倉宮ノ前遺跡の東に位置し、九十九里平野から入る谷津に侵食された標高33mの台地上にある。遺跡は東西150m、南北200mの平坦面が広が平坦面が広がる台地で、南には谷を隔てて長倉郷が推定される台地が隣接する。また、東は坂田城跡が築かれた寺方台地が北から南へ伸びて、栗山川を遮っている。

長倉鍛冶屋台遺跡

鍛冶屋台遺跡22号住居跡

長倉鍛冶屋台遺跡の弥生時代は、後期の12軒の住居跡が検出され、ここに集落が形成されていたらしいことが分かった。住居跡はいずれも竪穴住居で、形は楕円形から隅丸方形、4本柱に炉跡を有する。写真の住居跡は3.17m×3.63mの決して大きくない住居跡であるが、深さは0.5mあり、多くの捨てられた土器が出土した。

長倉鍛冶屋台遺跡出土の弥生土器は、南関東系の弥生土器と、北関東系の弥生土器とが出土し、特に22号住居跡からは両者が混在していた。全体では土器の出土量は決して多くなく、この遺跡の弥生時代の特徴を語ることは出来ないが、北関東系が強く入っているようである。

鍛冶屋台25号住居跡

鍛冶屋台遺跡出土弥生土器

（3）神山谷遺跡

神山谷遺跡は、丘陵状の細長い台地にあって、弥生時代住居跡は台地頂部から南先端の斜面部にまである。時期は中期後半から後期まで７軒の住居跡が検出され、集落までは形成されないまでも、パイオニア的な住居であったろう。

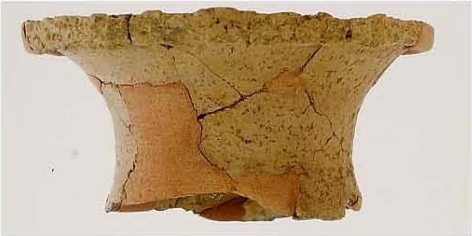
中期は台地頂部に２軒あり、後期ではその外側に点在する。中期では土器は南関東系の宮ノ台式壺が認められるが、遺物は少ない。後期では北関東系の土器が出土し、文化波及の転換があったと思われる。

篠本神山谷遺跡

神山谷遺跡弥生中期住居跡

神山谷遺跡弥生後期住居跡

南関東系
中期壺形土器



南関東系後期壺形土器

北関東系後期甕形土器

土製紡錘車

（4）篠本城山遺跡

城山遺跡は、神山谷遺跡の西側に谷を一つ隔てた台地上にあり、中世城跡が主であるが、縄文から平安時代の遺構・遺物も検出された。弥生時代では土器片が出土したのみである。土器片は中期初頭と思われるものと、後期南北両系統のものがある。

篠本遺跡群にはこの他、新台遺跡では土器片、夏台遺跡でも住居跡・遺物が検出されているが、僅かなところから割愛する。

城山遺跡出土の弥生土器

(5) 寒風城跡（神山台遺跡）

寒風城跡は、篠本城山遺跡の北東にあり、その南側に神山台遺跡が隣接し、その接する所が発掘調査され、弥生時代後期の住居跡が出土した。住居跡から出土した土器は南北両系統の土器である。また隣接する神山台遺跡からは、地元住民が角柱状鑿形石斧を発見している。

寒風城跡弥生住居跡

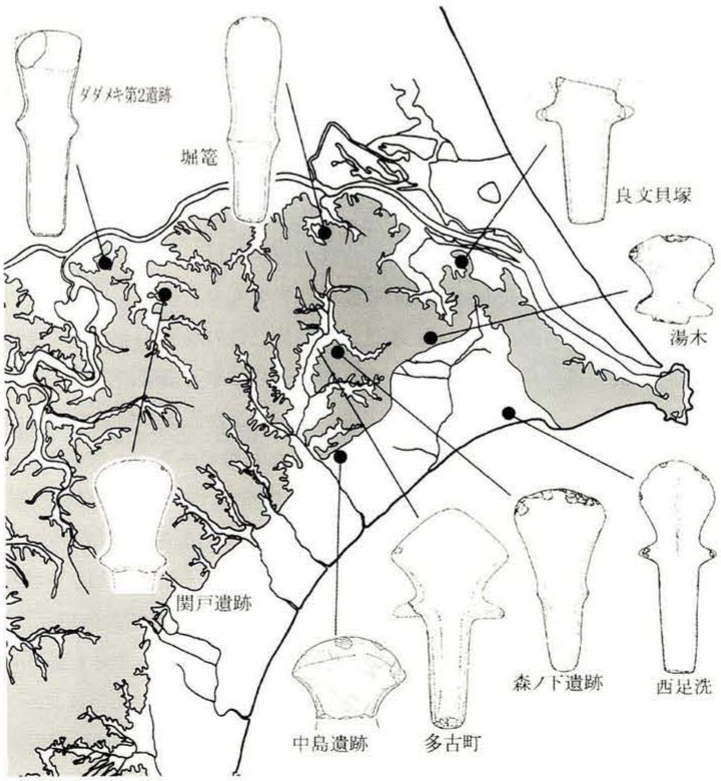
寒風城跡住居跡出土弥生土器

神山台遺跡採集
角柱状鑿形石斧

(6) 芝崎中島遺跡出土の有角石器

中島遺跡からは、平成16年の発掘調査の時、写真の有角石器が出土した。しかし、同遺跡からは弥生時代の土器等は全く検出されず、謎の遺物である。この有角石器は、千葉で28例、茨城で30例と、東関東で多く出土していて、搬出する土器から弥生中期のもとされ、その初原は銅剣等であると言われる。印旛沼以東の千葉県頭部では、本遺跡出土例を含めこれまでに9例あり、県内で3分の1を占めるほど密度が高いが、それに対し弥生時代遺跡は決して多いほうではない。また、この地域で出土した有角石器、あるいは同期石器の多くは単独出土である例が多い。この現象について、まだ言及された論は出されていない。

中島遺跡出土の有角石器



千葉県北東部の有角石器出土例

3 古墳時代の遺跡

町内には国指定史跡殿塚・姫塚古墳をはじめとして、多くの古墳が分布する。しかし、現在見られる古墳はわずかで、多くはこれまでの開墾等で失われてしまっている。それが発掘調査によって発見されることもあり、現在ではその実数は分からなくなっている。また、古墳はあくまでお墓であって、それを造った人々の集落も存在する。ここでは集落遺跡も含めて、古墳時代の町内遺跡を紹介しよう。

(1) 殿塚・姫塚古墳（中台古墳群）

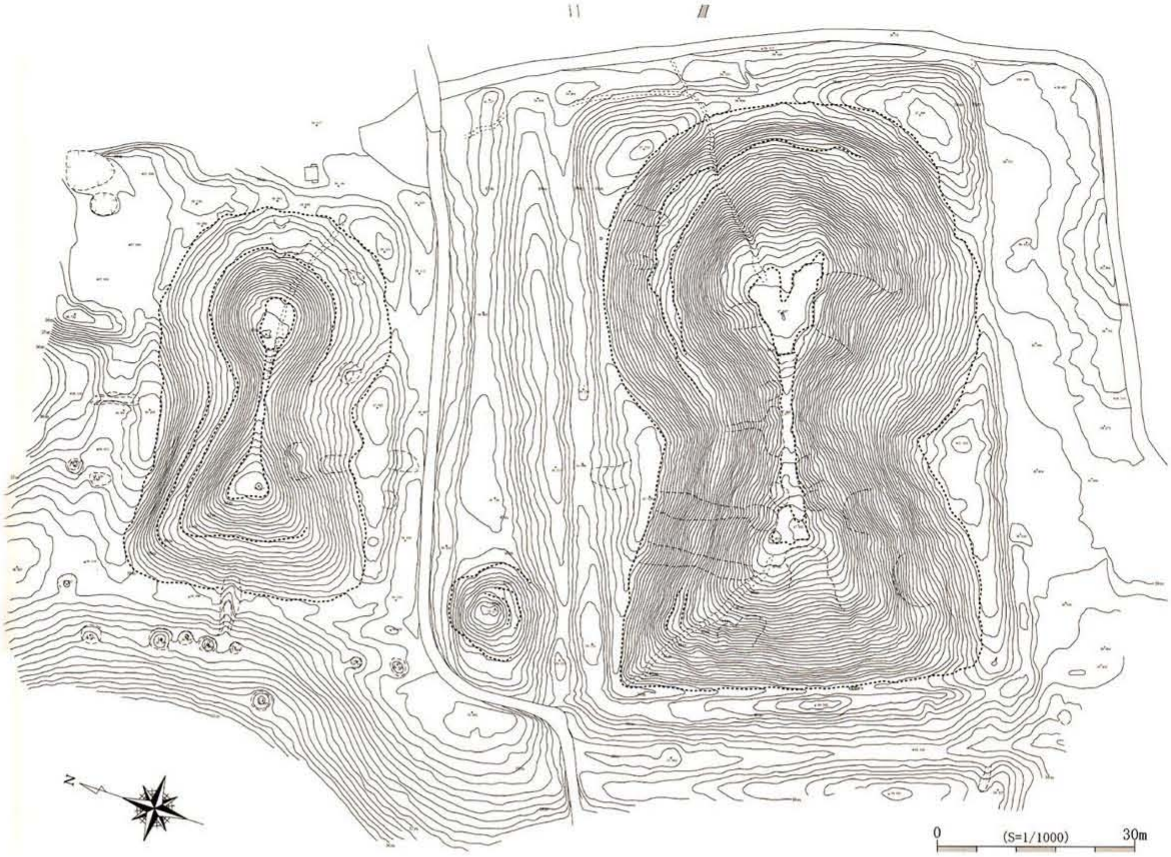
町の最北西部に位置する殿塚。姫塚古墳は、周りにも小古墳が分布し、合わせて中台古墳群（史跡名芝山古墳群）といわれている。して維持では合計13基あったと言われているが、現在では6基が確認されるのみで、他は消滅してしまっている。

中台古墳群の主墳である殿塚・姫塚古墳は、中台の台地に並んであり、昭和31年に早稲田大学を中心に地元の協力を得て発掘調査された。その発掘調査の結果、両古墳からは多数の人物や馬・犬・鳥などの形象埴輪が出土し、一躍世の注目されるところとなった。それによって中台古墳群は国指定史跡として、保存整備されることになった。

地元の人たちも加わった
殿塚・姫塚の発掘作業

姫塚の埴輪出土状態

（写真提供　芝山はにわ博物館）



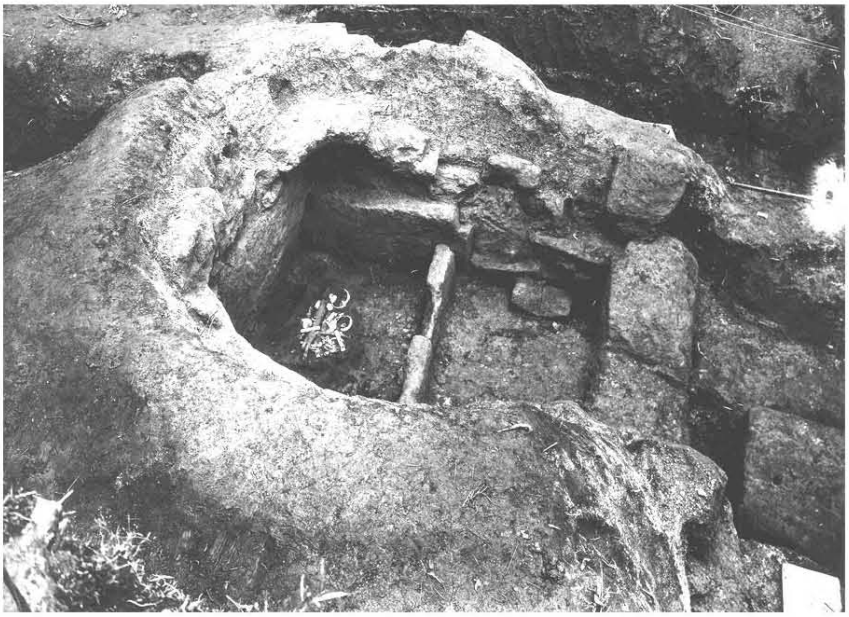
殿塚・姫塚古墳測量図（2012 年早稲田大学考古学研究室作成）

早稲田大学
考古学研究室の調査

殿塚・姫塚古墳の発掘調査では、両古墳から被葬者埋葬施設（主体部）が、墳丘の東側に、横穴石室として検出され、埴輪の多くは墳丘中段部の西側から出土した。発掘調査の結果」、殿塚が先に、姫塚が後に築造されたこと、築造時期は中期後半（6世紀前半）であることが分かった。

殿塚古墳の石室は、幅2.5m、奥行き2.7mで、盗掘を受けていたが、太刀、鏃、銅碗、装身具などが出土した。

姫塚古墳の石室は、全長6m、最大幅0.95mで、前室と奥室とを設けていて、殿塚の石室とは異なる。太刀、鏃、馬具、装身具などが出土した。



殿塚石室の発掘状況
（写真提供　芝山はにわ博物館）

埴輪は、両古墳とも墳丘の中段西側に多くあり、人物像は西を向くように立っていたのではないかと言われ、おそらく被葬者が治めていた集落を眺めるように、設置されたのかもしれない。

芝山町小池周辺には、古墳時代の集落遺跡が発見されていて、住居跡が多数検出されている。おそらく、殿塚・姫塚古墳と小池の集落遺跡とが密接な関係を有していただろう。それを示しているのが、埴輪と石室の位置なのであろう。

姫塚石室の発掘状況
（写真提供　芝山はにわ博物館）

姫塚古墳の埴輪発掘

殿塚古墳の石室調査

姫塚古墳の形象埴輪列

殿塚・姫塚の発掘調査（写真提供　芝山はにわ博物館）

姫塚出土の形象埴輪（写真提供　芝山はにわ博物館）

殿塚出土の形象埴輪（写真提供　芝山はにわ博物館）

（2）寺方古墳群

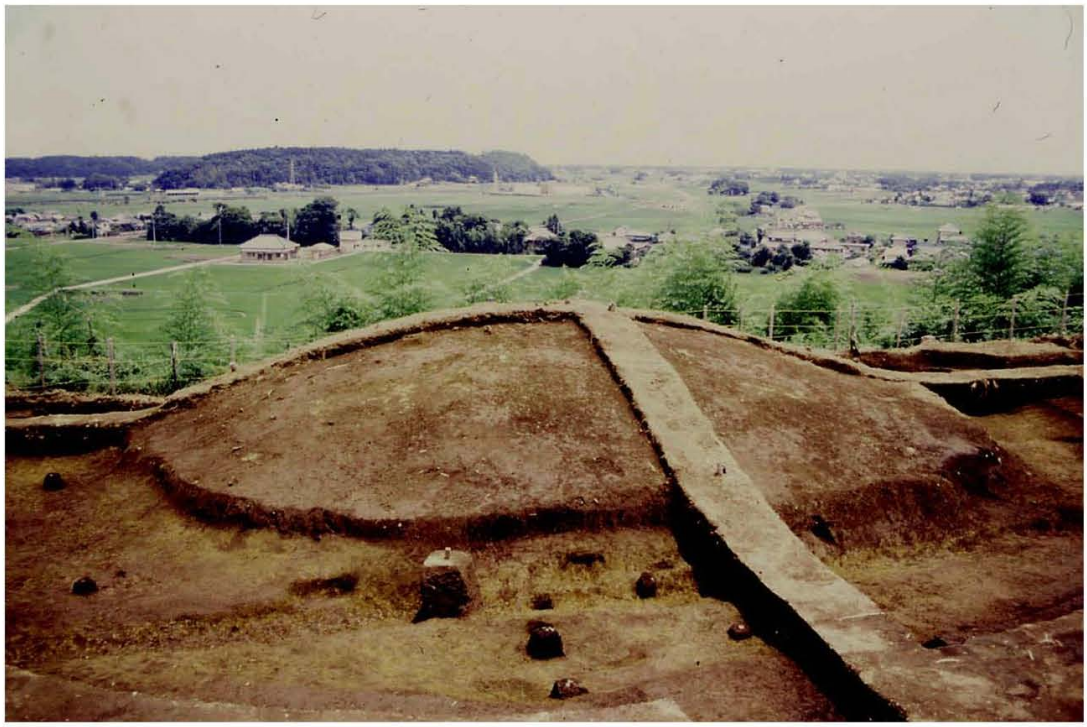
寺方古墳群は、栗山川左岸の標高33mの南北に細長く伸びる台地上にあり、昭和32年当時には前方後円墳3基、円墳23基があったとされるが、最近は計5基が残るのみであった。それも平成　14年の発掘調査によって3基が消滅した。

平成14年の発掘調査では、墳丘の残る3基と発掘のよって検出された古墳の跡3基が調査され、円筒埴輪、鉄鏃が出土した。中でも8号墳は二重周溝を有し、埴輪があることから前方後円墳の可能性もある。出土遺物から6世紀前半頃かと思われる。

本遺跡は墳丘下から古墳前～中期の住居跡が22基検出され、古墳時代前期から居住地として占地されていたが、中期以降墓域として聖地化したと思われる。

寺方古墳群空中写真

寺方7号墳



寺方７号墳（東から）

寺方７号墳埋葬施設

５号住居跡出土須恵器

８号墳出土の円筒埴輪

（3）長倉鍛冶屋台遺跡

鍛冶屋台遺跡からは、古墳時代後期の住居跡が、発掘した台地上全体から一様に分布するように81軒検出され、まとまった集落が形成されていたことが分かる。住居跡は出土土器から6世紀後半から7世紀全般にわたり、さらにその後も継続したが、縮小傾向になった。住居跡は一辺5m前後の方形で、北壁中央に竈を有する形態が多く、さらに柱穴と壁とを繋ぐ溝を有している住居が多いのが目立つ。

出土土器は、甕・甑・坩・杯・碗を主体として、高杯・須恵器は少ない。甕は胴長より丸形が多く、また杯・坩に赤色塗彩したものが多い。そのほか手捏土器・紡錘車・土玉・臼玉・鉄釘などがある。

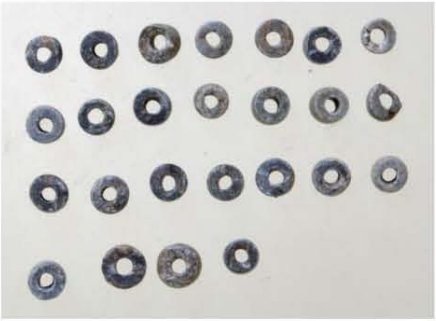
鍛冶屋台遺跡空中写真

鍛冶屋台29号住居跡（後期）

鍛冶屋台後期住居跡出土土器

子持勾玉

勾玉形石製模造品



臼玉

土製管玉・切子玉

土製勾玉

(4) 長倉宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、鍛冶屋台遺跡の小谷を隔てた西に位置し、弥生前期を先に紹介したが、遺跡の中心は古墳時代から平安時代の住居跡が125軒検出された集落遺跡である。その中で古墳時代は後期の住居跡が47軒あり、大宮神社のある遺跡の西部に分布する。住居跡は一辺４～９ｍと、鍛冶屋台遺跡に比べてばらつきが大きいほかは、竈の位置、仕切り溝などよく似ている。遺物は土器では甕・甑・杯・高杯・碗などがあり、宮ノ前遺跡では鍛冶屋台遺跡に比して高杯が多く、坩が少ない。それ以外の甕・甑・杯などは、よく近似しているまた、宮ノ前遺跡では須恵器が多く、中でも111号住居跡からは２点のはそうが出土しているのが特筆される。そのほか土玉・鉄鎌・鉄鏃・鉄滓・鞴羽口などがあるなどがある。

このように宮ノ前遺跡と鍛冶屋台遺跡とでは、ほぼ同時期で隣接していながら、住居規模、遺物の種類などに違いが見られる。鍛冶屋台遺跡は住居跡・遺物が平均的であるのに対し、宮ノ前遺跡は住居ごとの差が大きい。これは一つヒントと考えられるのが、宮ノ前遺跡には大宮神社の存在であろう。古墳時代、土地の有力者が大宮神社を造立し、神社の祭祀を掌って、集落を形成していったと推定される。おそらく宮ノ前遺跡の須恵器は、神社の祭祀に使われたものであったかもしれない。

長倉宮ノ前遺跡

宮ノ前 54 号住居跡

宮ノ前 64 号住居跡

宮ノ前 111 号住居跡出土土器

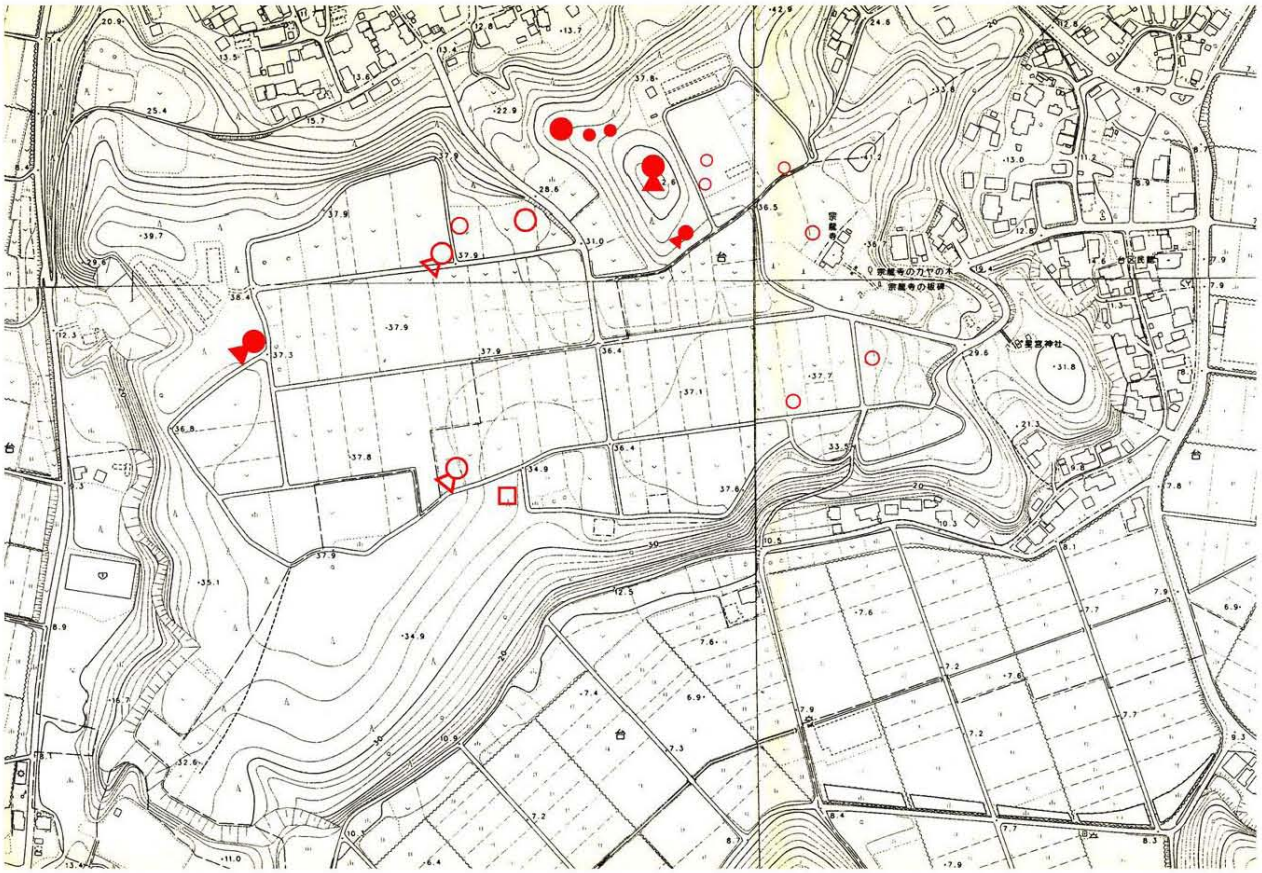
（5）小川台古墳群

小川台古墳郡は、栗山川左岸のひとつおくにはいった標高40m台地上にあり、台地は東西1km、南北500mの平坦な下総下位面で、古墳はその台地全体に分布していた。昭和40年代で18基確認されたが、現在は6基が残るのみとなった。当時で古墳は、前方後円墳が5基、円墳が12基、方墳が1基があった。現在なくなった古墳の多くは、耕地整理のため事前調査した後、削平されて消滅した。調査は昭和49年、芝山はにわ博物館が中心となって実施され、削平対象の1～5号墳の5基が発掘調査された。

調査された古墳の中で最も特筆されるのが、形象埴輪が多数出土した前方後円墳の5号墳である。5号墳は墳丘長30m、後円径21m、墳丘高は2.65mと、さほど大きくない前方後円墳で、墳丘の残存状態は良好であった。埋葬部（主体部）は後円部の墳頂にあり、幅1m、長さ4mの土坑で、直葬主体部であった。埴輪は墳丘左側（北西側）墳丘中段部に設置したように下半部出土し、上半部は墳丘下に散乱していた。埴輪の形状は武人像が4、男子像が1、女子像が4、馬像が5、そのほか鶏・水鳥・鹿などが確認されるが、円筒埴輪はない。主体部からは鉄製直刀6振・刀子・鏃・勾玉・ガラス玉などが出土した。

このほか円墳の1号墳からは2基の主体部が検出され、鉄製の剣・鉾・鏃・斧、滑石製模造品の有孔円板、臼玉が出土した。方墳の4号墳からは刀の鍔、須恵器の長頸瓶が出土した。

小川台古墳郡は、発掘された古墳の出土遺物から、6世紀から7世紀に築造され、埴輪が出土した5号墳がその初めの頃で、長頸瓶が出土した4号墳が最後となるものである。



小川台古墳群古墳分布

小川台５号墳埴輪出土状態

調査中を視察（一番手前が浜名氏、その左が滝口宏教授）

出土した時の鹿埴輪

小川台５号墳出土埴輪

4号墳出土の須恵器長頸瓶

5号墳出土の直刀

1号墳出土の鉄製品

小川台古墳出土須恵器・鉄製品

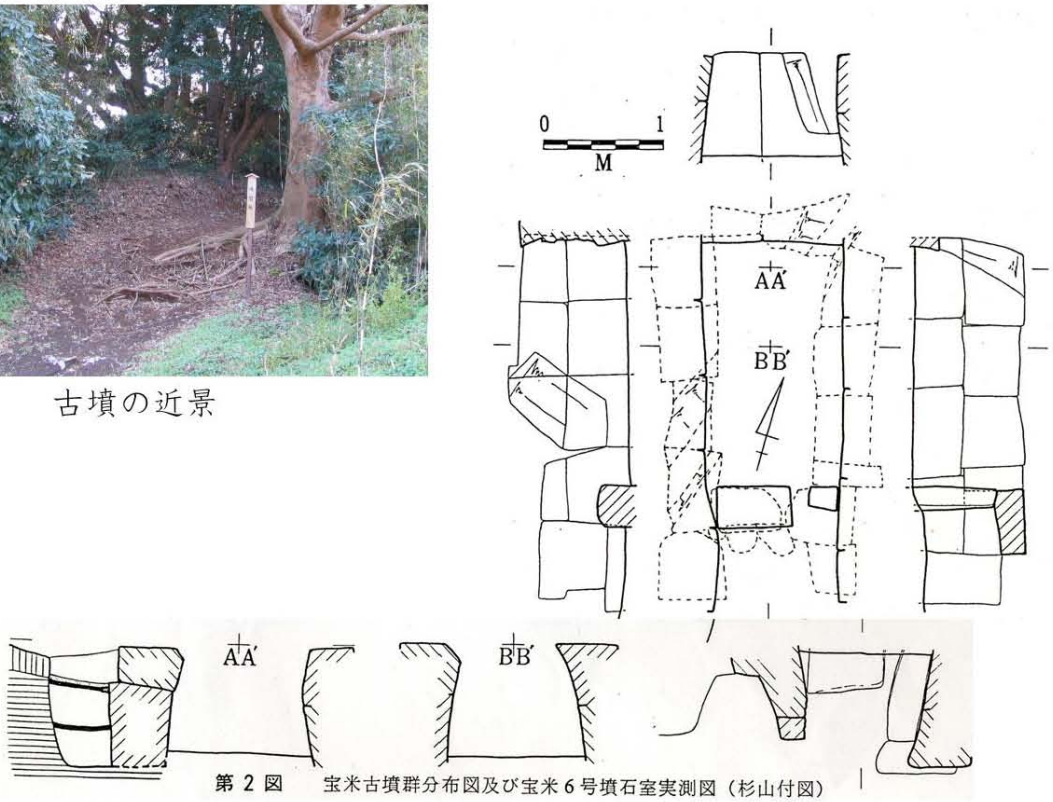
(6) 宝米古墳群

宝米古墳群は、栗山川左岸の広く平坦な下総下位面台地に、かつては10数基はあったといわれるが、昭和30年代の耕地整理によって、大半が削平消滅した。その削平されるとき、石室検出の報を受けた当時早稲田大学にいた杉山晋作氏によって調査、作成されたのが下の図である。

宝米古墳群は現在、南西端に1基見るのみで、、かつての古墳群の面影はない。

残された宝米古墳

古墳の近景



第2図　宝米古墳群分布図及び宝米6号墳石室実測図（杉山付図）

金鈴　号所収の宝米古墳石室実測図

（7）夏台古墳

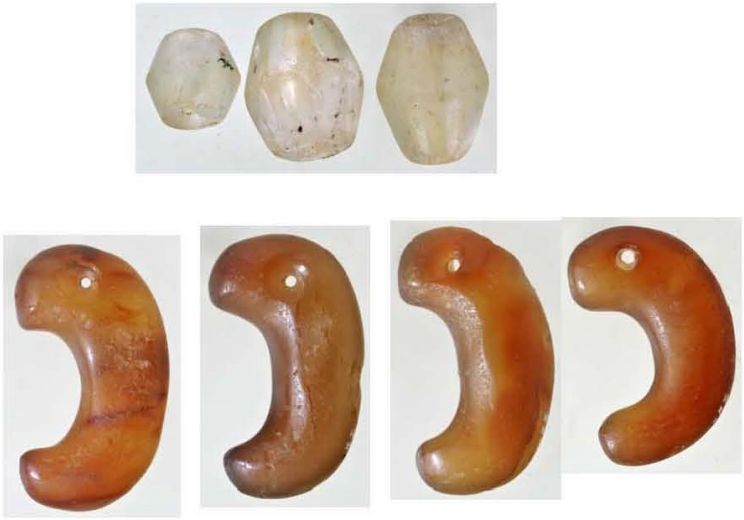
夏台古墳は、栗山左川岸の篠本夏台の下総下位面台地に昭和60年頃には確認されていたが、平成７年から始まった発掘調査の時には、墳丘はすでに消滅していた。

平成７年から８年にかけての発掘調査では、遺跡の南半分が実施され、５基の古墳跡と埋葬施設（主体部）が検出され、古墳群が存在したことが証明された。古墳の跡は墳丘の周りに掘られた周溝から分かり、その溝の形から円墳と方墳がそれぞれ２基と主体部のみ１基があった。主体部はいずれも周溝に囲まれたほぼ中央部から検出され、そのうち円墳の２号墳は、その跡の形状と散乱した石片から横穴石室であったろうと推定される。それ以外の主体部は底面に石をはめた溝と石片が検出され、箱式石棺であったと思われる。しかし、いずれも石室・石棺の石材は悉く持ち去られ、石片のみが認められるだけであった。従ってこれらの主体部からの副葬品は、ほとんど望むべくもなく、僅かに鉄製品の破片が出土したのみであった。。けれども１号墳南側に同期土坑墓が検出され、ガラス玉、瑪瑙製勾玉、水晶製切子玉が出土したのは、盗掘を免れたためであろう。

２号墳（左上部が石室跡）

夏台遺跡３号墳

３号墳埋葬施設



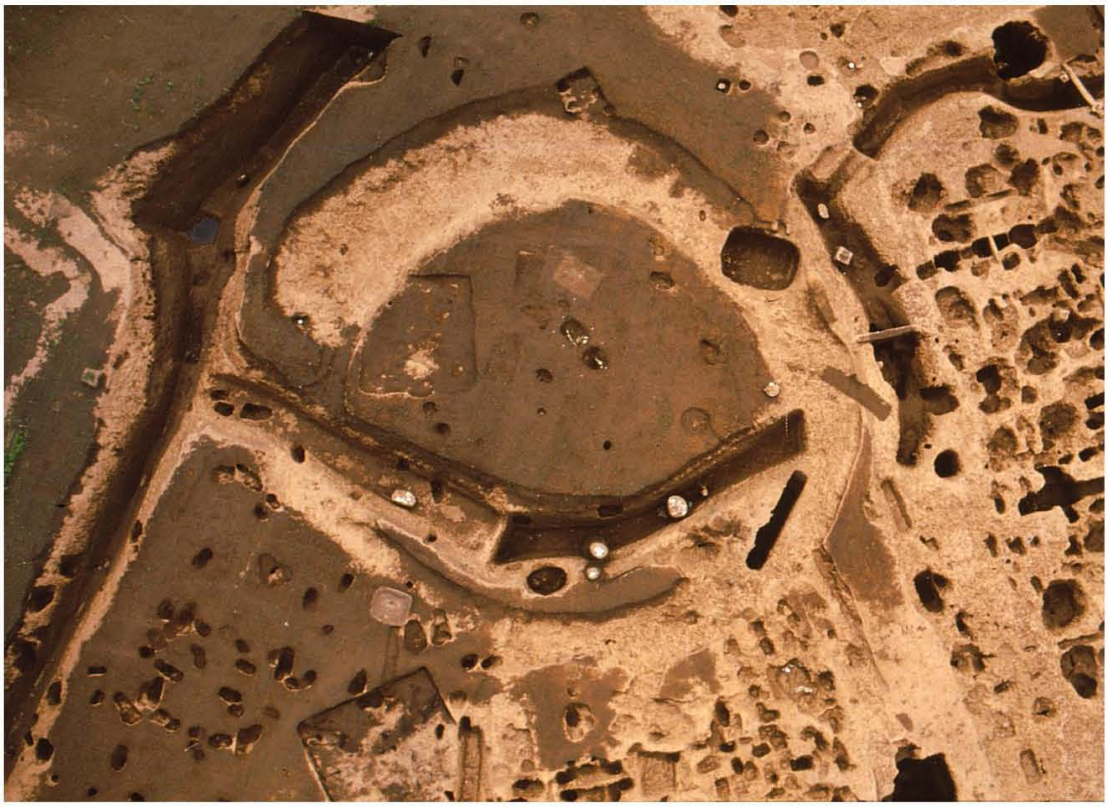
夏台遺跡土坑墓出土の副葬品
（上　水晶製切子玉
下　瑪瑙製勾玉）

（8）篠本城山遺跡

城山遺跡は、古墳の存在は発掘調査するまで不明であったが、平成５年からの発掘で、古墳の跡と埋葬施設の検出で存在が明らかとなった。古墳の跡は台地中央部に２基確認され、墳丘の周りに掘られた周溝が検出された。いずれも円墳で、１号は周溝内径が 16.5m、周溝幅 1.8 ～ 5.5m、深さが 0.2 ～ 0.75mである。２号は周溝内径 12.8mで一回り小さい。どちらも埋葬施設は検出されず、墳頂部にあったろう。なお、本遺跡は中世城郭が主体で、古墳跡内にはほとんど中世遺構がないことから、築城時には墳丘があったものと推定され、おそらく物見台として利用された可能性も考えられる。

また、遺跡北部には周溝を伴わない埋葬施設が２基検出され、１基は２段掘りの直葬墓、もう１基は組石石棺であった。直葬墓は北東側に枕石があり、坑内に散乱するようにガラス玉、琥珀棗玉、鉄鏃が出土し、後世に荒らされた痕跡がある。石棺墓は北東側斜め半分が堀で壊され、そのためかはわからないが、被葬者骨及び副葬品等は出土しなかった。

このほか、本遺跡からは古墳中期の住居跡が台地上から２軒、東側斜面下位で３軒検出された。特に台地上の２軒は、遺物が少なく古墳や埋葬施設と何らかの関係が考えられる。



城山１号墳跡

1号埋葬施設

2号埋葬施設

5号住居跡

18号住居跡

1号埋葬施設出土副葬品

1号墳出土はそう

18号住居跡出土土器

(9) 神山谷遺跡

神山谷遺跡は、城山遺跡の小谷を隔てた東側の、南北に細長い台地にあり、台地先端近くの高所に古墳跡が検出され、先端斜面部に方形周溝墓や住居跡などが発見された。古墳跡は３基、いずれも周溝が台地先端近くで検出され、形状は円形で、主体部は発見されなかった。また、方形周溝墓は台地先端に近い斜面部で、山側に溝が残っていた。いずれも埋葬施設は検出されず、時期的には確認できないが、方形周溝墓は溝から古墳中期の土器が出土し、時期を知ることができた。

神山谷遺跡台地先端の古墳群

神山谷遺跡先端斜面部から検出された方形周溝墓

神山谷遺跡１号住居跡

神山谷遺跡 113 号住居跡

神山谷遺跡１号住居跡
出土土器

神山谷遺跡 120 号住居跡出土土器（古墳前期）

神山谷遺跡方形周溝墓出土土器（古墳中期）

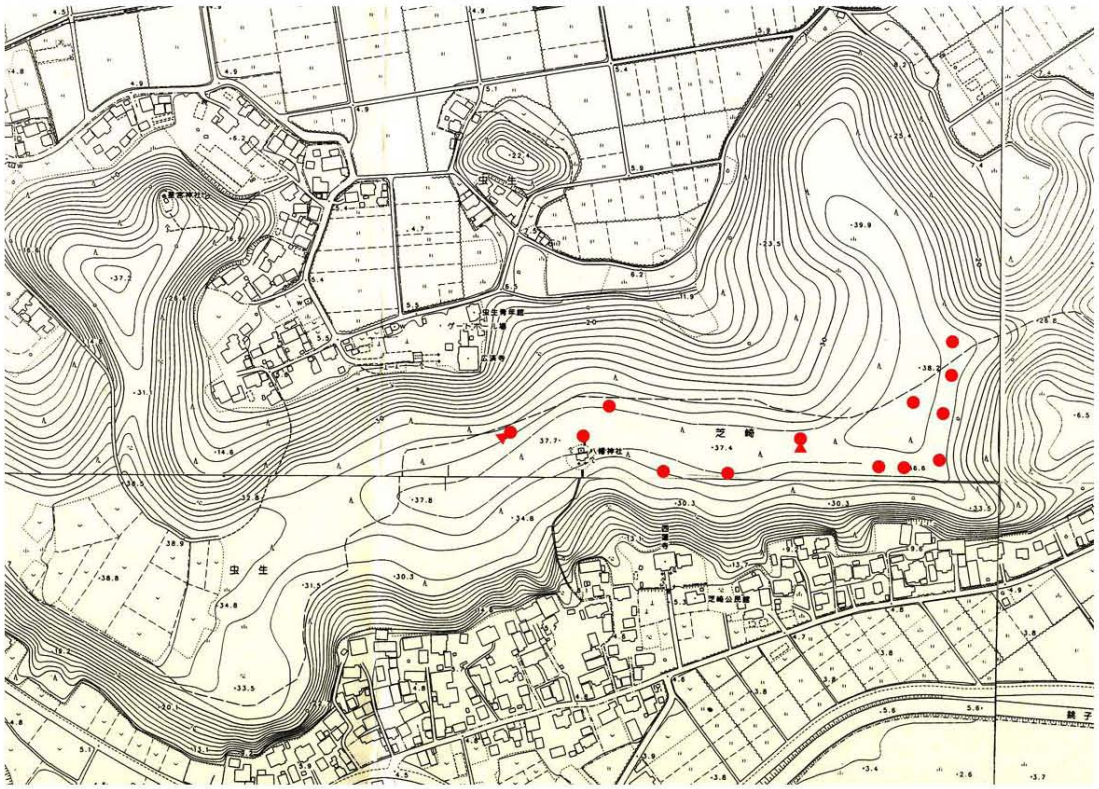
神山谷遺跡出土の宝飾品等

(10) 芝崎古墳群

芝崎古墳群は、前面に九十九里平野を望む栗山川左岸の台地にあり、東西に連なる台地に10数基の古墳が分布する。古墳は前方後円墳2基、円墳が10基ほど数えられる。同古墳群は正式には調査されておらず、その分布位置、規模、基数などは性格には捉えられていない。

また、芝崎台地の前面の低地遺跡、芝崎遺跡、中島遺跡からは、古墳時代中期から後期の遺物が出土しているが、住居跡等は検出されていない。

芝崎古墳群の一つ



芝崎古墳群分布

(11)傍示戸遺跡

傍示戸遺跡は、栗山川左岸で同川を望む台地上にあり、古墳群のある小川台が東隣に位置する。台地の北部には寅間台古墳があり、南部から平成16年の古墳時代中～後期の住居跡14軒と掘立柱建物跡1棟が検出され、集落遺跡があることが分かった。住居跡は一辺3～5mと、この時期としては小規模で、床面までの深さも浅く、遺物も少ないことから、パイオニア的集落であったと思われる。

傍示戸遺跡空中写真

傍示戸6・7号住居跡

8号住居跡

参考文献
八匝教育委員会・小川台古墳群調査団(1975) 下総小川台古墳群―千葉県匝瑳郡光町小川伊古墳群調査報告書―
（財）東総文化財センター(2000) 篠本城跡・城山遺跡
（財）東総文化財センター(2000) 夏台遺跡
（財）東総文化財センター(2002) 神山谷遺跡（1）
千葉県(2003) 千葉県の歴史　資料編　考古２（弥生・古墳時代）
（財）山武郡市文化財センター(2006) 寺方古墳群
（財）山武郡市文化財センター(2007) 長倉宮ノ前遺跡
（財）山武郡市文化財センター(2007) 長倉鍛冶屋台遺跡
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館・芝山はにわ博物館・早稲田大学文学部考古学研究室(2012) はにわと共に生きる町

協力者
今回の展示に当たって多くの方々のご協力を得ました。特に殿塚・姫塚古墳のジオラマを造るにあたっては、横芝光町ふるさと歴史ロマン研究会に全面的なご協力を、また、殿塚・姫塚古墳出土の埴輪展示には、芝山はにわ博物館の特別な御拝領を頂きました。図録を作るにあたっては写真の提供も芝山はにわ博物館から賜り、また、古墳測量図の使用に対しては早稲田大学文学部考古学研究室の御配慮を頂きました。ここに記して御礼申し上げます。
横芝光町ふるさと歴史ロマン研究会（西山太郎、伊藤公男、市原勝、實川恵美子、高久昌子、樋口広三、鈴木範子、吉岡元子、池田勝子，小椋幸枝）
芝山はにわ博物館（浜名徳永館長、稲垣弘）
早稲田大学文学部考古学研究室（城倉正祥）
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館（奥住淳、渡辺修司）

平成２５年度企画展
考古資料で見る横芝光町の歴史２
―弥生・古墳時代―

発行日　平成25年10月5日
編集・発行　横芝光町教育委員会
印刷　三陽メディア株式会社